

PR×英語あるある「経験が命」

PR 総研 上瀧 和子（共同 PR）

いろいろなメディアで PR について語る人が増え、「日本の PR も進化している」と嬉しくなります。一方で、実際に仕事を一緒にする人となると、やや別の話。論理的に語ることと、PR 会社のように現場で実践することとは、異なる器量が必要だからです。そこで、世界規模の歴史的な PR 実績を持つジム・ハーフ氏に、経験の重要性を聞きました。



Jim Harff, President and CEO of Global Communicators

■「なるほど」の説得力は経験から

ハーフさんに会ったのは今から 3 年前の 2016 年 10 月。都内で「「パブリックディプロマシー・サロン」ジム・ハーフ氏を囲んで」というイベントがあり、あのヒーローにあえると喜んで参加しました。PR 業界では名高い『戦争広告代理店～情報操作とボスニア紛争』（高木 徹著、講談社文庫刊）の主人公の登場です。目の前のツールに座って膝をつき合わせるほどの距離、こじんまりとした穏やかな雰囲気の中、世界舞台で活躍してきた百戦錬磨の年長者の話聞くのはとても刺激的で、興奮しました。

ハーフさんが広報戦略を駆使したボスニア戦争が、世界的ニュースだった 1990 年代半ば、わたしはまさにニューヨークで国際関係を勉強する大学生でした。日本からの留学生として、まだ英語になれていないという言葉の問題はもちろん、なかなか覚えられない地名、人名などの固有名詞、複雑な歴史に頭がオーバーヒート。「なにが事実だろう」と一生懸命、読み解こうとしていました。

その報道の背後で戦っていたのが、このハーフさん。その伏し目がちで控えめな行動、穏やかな語り口には、これこそ同業者だからわかる、信頼のオーラが漂っています。そう、実力ある PR パーソンは、いつでもスピーカーと報道機関が自由に動けるよう、自分がその邪魔にならないよう、強く自律しているものなのです。

PR 経験談を惜しみなく話すハーフさんに興奮したわたしは、質疑応答の時間になり「複雑な状況のなかで、どうやって自分が正しい広報判断をしていると確信を持てたのか（How were you sure about you were making right decisions in PR when things were so complicated?）」といった質問をしました。

うっかり、通常冒頭に述べる「大変勉強になるお話、ありがとうございました (Thank you so much for your insightful talk)」といった挨拶もすっとばした失礼な質問に、内心ちょっと冷や汗。



Kazuko Kotaki, PR Research Institute,
Kyodo Public Relations with Jim Harff.

にもかかわらずハーフさんは、静かに「何年もかけて膨大な調査をし、チームで事実の洗い出しを続ける。その経験から、何をすべきか、広報判断に確信が持てるようになる(I conducted years of research and continuous fact findings as a team. Experience is very important in PR because that makes you know what to do.)」と回答。わたしは「まさにそのとおりだ!」と感嘆の思いでした。PR パーソンの経験は世界共通、時代を超えてユニバーサルな価値があるのです!

PRにおける実力をどうつけたらいいのか、悩む人も、心配しないでください。自分を信じて経験を積み、どんなに苦しい時間や条件の制約の中でも、状況判断ができるようになります。そして、判断するリスクを取る自信がつきます。世界的な PR 実践の権威が保証します(笑)!